

積雪環境下で育つ子どもたちの冬期の外遊びに関する研究

遠藤 幹康 （東京学芸大学）

1. 目的

本研究の目的は、積極的に雪遊びに取り組む子どものふだんの遊びに関する特徴から、雪遊びの効果や可能性を検討し、雪遊びを通して運動に親しむ子どもを育成するための知見を得ることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者…新潟県の積雪地に住む小学校1～6年生の男女130名
- 2) 調査方法…雪遊びを行う頻度や、ふだんの遊び様子に関する質問紙調査を実施した。
- 3) 分析方法…雪遊びの頻度についての因子分析を行った。抽出された2つの因子について、子どもたちのふだんの遊びの特徴との間で、2群間においては t 検定、3群間以上においては一元配置分散分析を行った。

3. 結果と考察

- 1) 因子分析の結果、雪遊びは積極的に体を動かす「アクティブ・スリル」因子と、雪を使って自由に制作する「造形遊び」因子に分類できた。
- 2) フェイスシート項目との関連について分析を行ったところ、雪遊びに積極的に取り組むかどうかは、性別や学年に関係ないことが分かった。また、習い事において専門的なスポーツ種目を実施している子どもは、雪遊び場面でも積極的に体を動かす「アクティブ・スリル」因子に分類される遊びに取り組んでいることが明らかになった。
- 3) 子どものふだんの遊びとの関連について分析したところ、雪遊びに積極的に取り組んでいる子どもは、ふだんの遊びにおいてもルールや方法を決めたり、コツを教えたりするなど、遊びを高めるために工夫をしているという特徴があることが分かった。
- 4) 2つのそれぞれの因子に分類される雪遊びについて検討した結果、雪遊びには子どもに多様な動きや直接的経験の機会を与え、思考力・判断力が養われることで、ふだんの遊びを高める可能性があることが示唆された。また、ふだんの遊びを高

めることで、子どもたちの体力向上や、体を動かすことへの関心が高まることも期待できると考えられた（図1）。

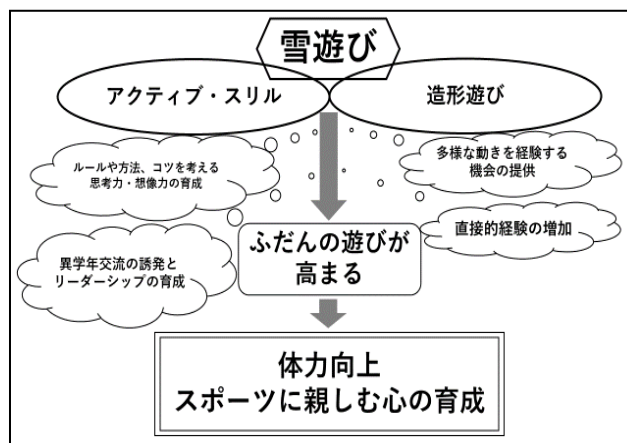


図1 雪遊びが子どもにもたらす効果について

4. 結論

本研究では、雪遊びを積極的に行う子どもは、ふだんの遊びでも工夫して遊んでいることが明らかになった。さらに、雪遊びを行うことで、結果的に子どもたちの体力向上やスポーツに親しむ心の育成につながる可能性があることが示唆された。以上のように、子どもたちが積極的に雪遊びに取り組むことについての意義や構造に視点を与えることができたことが本研究の成果である。今後は、子どもの雪遊びを誘発させ、さらに雪遊びの効果を発揮できるような遊び環境の提案についての検討が求められる。

5. 主な参考文献

- 1) 阿部・中出(1993)積雪地域における子どもの遊び場選好に関する研究. 都市計画論文集 28, 751-756
- 2) 浅川・五十嵐・鈴木(1994)積雪寒冷都市における冬期の子どもの遊び場について. ランドスケープ研究, 58(1), 61-64
- 3) 徳田・吉田・青木・竹田・吉田(2017)スノーゲームの身体的・心理的效果に関する研究(2)小学生を対象とした調査の結果から. 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報, 8, 1-9